学習院大学教職課程年報
第10号　2024年５月　pp.97-100.

水書用筆の有効性

Effectiveness of Water Calligraphy Brushes

松　岡　千賀子*
MATSUOKA　Chikako

１　はじめに

2017年（平成29年）７月告示「小学校学習指導要領解説　国語編」では、第１・第２学年の国語（書写）の授業において水書用筆を用いた指導法が例示された。これまで毛筆は第３学年以上と定められており、第１・第２学年は硬筆のみの授業が行われてきた。従って、毛筆と類似した筆記具が提案されたことは注目に値する改訂ポイントといえる。けれども実際の教育現場において、その有効性が感じられるほど活用されているとは言い難い。そのため本稿では、水書用筆を使って用筆指導をするにはどのような方法があるか考えてみることにする。

２　水用筆使用の利点―学習指導要領解説から―

小学校学習指導要領には「書写に関する次の事項を理解し使うこと。」の１つとして「点画の書き方や文字の形に注意しながら、筆順に従って丁寧に書くこと。」という一文が記載されている。これまでの字形重視の指導だけでなく、運筆についても留意することが求められるようになったのである。

その指導に有効な用具の１つとして挙げられているのが水書用筆である。水書用筆とは水書用紙専用に使われる筆記具のことで、軸に水を入れて使用する。市販の筆ペンのインクが水に代わったものを想像すると分かりやすい。その水書用筆を取り入れる利点として、小学校学習指導要領解説（2017）には以下のように記されている。

> 水書用筆は、扱いが簡便で弾力性に富み、時間の経過とともに筆跡が消えるという利点をもっている。その特性を生かして、「点画」の始筆から、運筆、終筆（とめ、はね、はらい）までの一連の動作を繰り返し練習することは、学習活動や日常生活において、硬筆で適切に運筆する習慣の定着につながる。また、水書用筆等を使用する指導は、第３学年から始まる毛筆を使用する書写の指導への移行を円滑にすることにもつながる。

つまり

① 取り扱いが容易である。
② 反復練習に適している。
③ 毛筆に近い練習ができる。

という点が水書用筆の長所ということである。

＊学習院大学教職課程非常勤講師

３　水書用筆を用いた授業案

担当する教育学科の授業（書道Ａ・書道Ｂ）では、将来自分が実践してみたいと考える指導案の作成を課している。それらの中には「美術と連携させ、水書用筆を使って絵と字を描かせる」「音楽と連携させ、歌いながら書かせる」等、水書用筆を使った指導案も見受けられる。今年度提出されたものの１つに「どこが最後まで残っている？」と題した指導案があった。内容を簡単に記すと、「児童に水書用筆で指定した文字を書かせる。そして乾く過程でどの部分が消えずに最後まで残るかを互いに予想させる。（ゲーム感覚で取り組ませることにより、意欲を引き出すことを狙いとする。）」というものである。

その指導案を一読した際、次の疑問が生じた。

普通に考えれば最後に書いた線が残る可能性が高い。だが、書き方が悪ければ意外な線が残ってしまう場合もあるだろう。ゲーム感覚で楽しめるという点では字を書くことの興味付けとなるであろうが、書く人によってどこが残るか分からないものを予想させることにどれ程意味があるだろうか。

だが少し見方を変えた結果、「人によって異なる残線を予想する」のではなく、「皆で同じ点画が残る」ことを目標にさせてはどうかと思いついた。意図する点画が消え残るように試行錯誤することは即ち用筆の練習であり、それができるようになることは用筆の習得を意味するのではないだろうか。

以下がその「消え方の違いを正しい用筆の見極めに使う授業案」である。

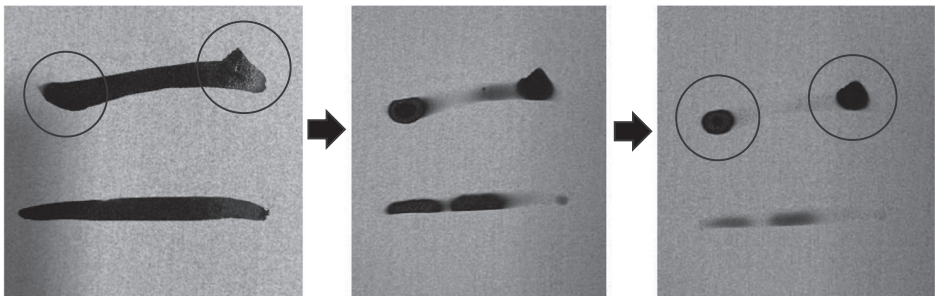
【水書用筆を用いた授業案】

「最後まで残そう！」

―水書用の紙に指定した点画が最後まで消え残るように書いてください―

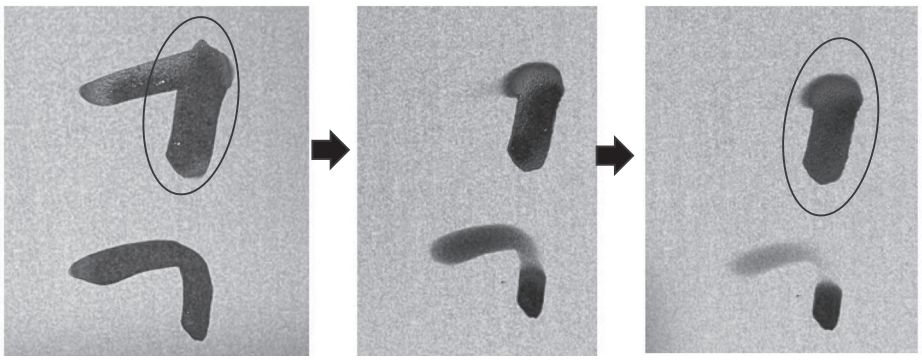
Ａ、起筆と終筆が最後まで残るように書いてみよう。…横画「一」の字の練習

ア　　イ　　ウ



Ｂ、縦線が最後まで残るように書いてみよう。…折れ（転折）の練習

エ　　オ　　カ



Ａ・Ｂともに上段が正しい筆づかいで書いた場合、下段が正しくない筆づかいで書いた場合である。時間の経過と共に、ア→イ→ウ、エ→オ→カの順に点画が消えていく様子が確認できる。

Ａにおいては、正しい筆づかい（起筆・終筆をしっかり押さえる）で書くと、最後まで線の両端が消えずに残る。一方、正しくない筆づかいで書いた場合は、線の両端に水が載らないため先に消えてしまい、本来ならば最初に消えるはずの中央部分が最後まで残っている。

一方、Ｂにおいては、「折れ（転折）」を正しい筆づかい（折れの部分で一旦止まり、筆圧を加えて方向を変える）で書くと、曲がった後の縦画が消えずに残る。しかし、正しくない筆づかい（止まらずに線の方向を変える）の場合は曲がる際に筆圧が加わらないため、折れの部分から先に消え始めていることが確認できる。

起筆・終筆・折れの筆圧の加え方や止め方は、毛筆のみならず文字をきちんと書く上での最重要事項である。そうした基本的な用筆を学習する手段として水書用筆は有効といえる。通常疎かになりがちな筆づかいの基本も、線の消え方を通じて視覚的に捉えることにより、分かりやすく習得することを期待できるのである。

４　課題

２で記したように水書用筆は利点が多い。しかし、実際に授業で使用すると以下のような問題点も生じてくる。

①時間経過に伴う消失

書いた文字が時間とともに消失し、同じ紙を使って何度も反復練習できるという利点は、記録・保存に適さないという欠点にもつながる。40名学級の場合、１人の教員が児童全員の作品を文字が消える前に添削し終えるのは難しい。練習前→練習後の成果を確認することも不可能である。

この問題を解決する手段として、近年急速に発達したタブレット等電子機器の利用が非常に有効である。現在、多くの学校が児童１人に１台のタブレットを貸与しており、授業中の活用も増えている。書いた文字をすぐに写真に撮って教員に送信し、場合によってはクラス全体で写真を共有するという授業形態の浸透により、時間の経過に伴う水書文字の消失という問題は解消できるのである。

②サイズ感の違い

現在、水書用筆はどのメーカーも小筆サイズである。したがって硬筆・小筆の用筆練習として捉えれば問題ないが、「第3学年から始まる毛筆を使用する書写の指導への移行を円滑にする」という点については不足感を否めない。筆の持ち方ひとつをとっても、通常の筆サイズ（３号･４号）と小筆サイズでは異なる場合があるため、小筆を使えるようになったからといって普通の筆でも同じように書けるとはかぎらない。そもそも小筆の扱いはこれまであまり時間が割かれてこなかったため、小筆の練習を強化することを目的とすれば問題ないが、第３学年以降の毛筆授業との連携はあまり期待できないのである。高学年への移行を円滑にすることを目的とするのであれば、普通の筆と同じサイズの水書用筆を取り入れる方があきらかに有効であると考える。

5　おわりに

パソコンが普及し、手書きの文字が少なくなっている現在、伝統文化の継承という点においても書写の指導は極めて重要である。従って、これまで第３学年以上に限定されていた毛筆の筆づかいを、水書用筆の学習を通じて第１学年から学べるようになったことは喜ばしい変化といえよう。何より、これまで掃除が大変という理由で避けられてきた書写の授業を、汚れを気にせず取り組めるようになったことは大きな一歩である。まだまだ改善の余地の多い水書用筆の授業が今後どのように展開されていくのか、注視していきたいものである。

【参考文献】

文部科学省　小学校国語科学習指導要領（2017（平成29年）告示）
文部科学省　小学校学習指導要領解説（国語編）（2017（平成29年））